ISSN 2433-345X

言語文化研究　徳島大学総合科学部
第二十五巻　別刷　二〇一七年十二月

『蜻蛉日記』上巻前半部の長歌贈答をめぐる考察

堤　和　博

ISSN 2433-345X

『蜻蛉日記』上巻前半部の長歌贈答をめぐる考察

堤　和博

はじめに

かつて何本かの拙稿の内容も取り込んで『和歌を力に生きる』[1]という題名の一般読者向け書籍を上梓した。その後も、より精緻な論を目指して、同著の内容に修正を加えて幾つかの論文を発表した[2]。本稿はそれらに続き、『蜻蛉日記』上巻前半部[3]の最末尾部分、道綱母と兼家の間に長歌の贈答があって上巻の記事空白の期間に入る辺りまでを取り上げる。

この「和歌を力に生きる」は一般読者向けの書籍の題名として使った言い回しではあるが、後の論述の便宜上この表現乃至はこれに類する表現を使用したいので、本稿においてこの表現でどういうことを言い表したいのか、予め明らかにしておく。おおよそ次のようなことが念頭にある。

Ⅰ　道綱母は、理想としては兼家からの贈歌で始まる贈答歌の成立を求めていた。それが二人の愛情の確認に繋がると思っていた。歌は正統な古今調の歌である必要があった[4]。また、愛情確認には、返歌で贈歌の内容に鋭く切り返すことも必要だと思っていた[5]。

Ⅱ　結婚成立後は兼家からの贈歌はめっきり少なくなり、[6]自ら歌を贈ることが多くなった。この多くは、鈴木一雄[7]が分析した「女からの贈歌」がなされる場合に当て嵌まる。[8]即ち、「男との仲の危機あるいは悪化」が見られる時に、「女のあせり、歎き、訴え、渇きなどの強調」が歌でなされる場合である。

Ⅲ　町の小路の女の出現後、道綱母は感情が昂ぶると兼家に対しては古今調の正統な歌を詠めなくなり、たとえ詠んでも贈る気になれなかった。その代わりにと言ってよかろう、時には時姫に歌を贈ったり、歌語り享受[9]などに向かったりした。

Ⅰ～Ⅲを全体的に捉えると、[10]「和歌を力に生きる」というより、「和歌の力に縋って生きようとする」と言った方が正鵠を射ているかもしれない。さらには、「……でもそれが叶わない時には……」などとも付け加えなければならない。が、そこは一般読者向けの書籍であることもあり、端的に「和歌を力に生きる」と題した次第である。本稿では、ⅠⅡⅢのどれに該当するかをなるべく示しつつ、この言い回しを用いて論述を進めていく。

さて、こんな道綱母の生きる姿に変化が生じると言うか、変化を迫られたのが前半部末の町の小路の女の零落から兼家との長歌贈答の辺りで、この変化によって前半部と後半部の間の記事空白期間も生じたと考える。ⅠⅡⅢに即してもう少し言えば、右で言うところの和歌とは勿論短歌形式の歌なのであるが、Ⅱに相当する長歌を贈り、兼家からもたらされた返長歌を読み、特にⅠについて道綱母は考えさせられるところがあったのではないかと想定するものである。[11]

一

九五八年に兼家の寵を失った町の小路の女に対する憎悪を道綱母は書き連ね、「今ぞ胸はあきたる」[12]と言う。しかし、続いて「今ぞ例の所にうち払ひてなど聞く。されど、ここには例のほどにぞ通ふめれば、ともすれば心づきなうのみ思ふ

……」と書いているのは、町の小路の女の所から自分の許に戻ってくるかと思っていた兼家が、時姫の所にばかり足繁く通うことに対する不満と失意の表れだと読み取れる。そして、次のように述べてから、当時は前時代的なものになっていた長歌を詠むのである。

かくて、又、心のとくる世なく、嘆かるゝに、なまさかしらなどする人は、「若き御こゝちに」など、かくては、いふこともあれど、人は、いとつれなう、「われやあしき」など、うらもなう、罪なきさまにもてないたれば、いかゞはすべきなど、よろづに思ふことのみ繁きを、いかでつぶ〳〵といひ知らするものにもがなと思ひ乱るゝとき、心づきなき胸うちさわぎて、ものいはれずのみあり。なほ書き続けても見せむと思ひて、

第三節で取り上げて問題にする経緯を経て長歌は兼家に渡るのだが、ここでこのような行為に出たことに対しては様々な見方がなされている。次の宮崎荘平[13]の見解などは、今引いた長歌の直前にある記述からすると自然な理解としては首肯されるものである。

作者の胸中に鬱積する思いは、単発的な和歌などによっては到底表出することのできぬもので、それは言葉＝口頭言語によって直接兼家に訴えかけたいものであったのだろう。（中略）日常語による伝達を断念せざるを得なかった道綱母は、そこで長歌形式にして「つぶつぶと言い知ら」せる方法を採ったわけである。

しかし私は、右の説明のうちの、私に付した波線部に特に注意したい。引用が長くなるので中略した部分があるが、この書き方によると、道綱母は「胸中に鬱積する思い」を「単発的な和歌」で「表出すること」は端から諦めてしまっているかのごとくでもある。叙述の理解としてはそれが自然なようでもあるが、和歌を力に生きる前半部のここまでの道綱母の姿を追ってきた目からすると、この叙述の裏に、道綱母は今まで通り短歌形式の和歌でもって兼家に自己の思いをぶつ

けようと一旦は模索したが叶わなかった、つまりⅡの姿勢を見せようとしたと想定すべきだと考える。また、それが重要な節目になるとも考えるのであるが、それは追々論じていくとして、以下は、引き続く推移を今述べた想定に添って跡づけておく。

とにかく、すんなりとⅡにはいかなかったのだが、それは、今までとは状況が違うからである。これまでも気持ちが落ち着いていた時には兼家と贈答歌が成り立った時もあったのだが、それにしても、和歌の贈答による愛情確認によって気持ちが落ち着いたのでは恐らくなく、[14] 況んや兼家が町の小路の女の関係を切ったわけでもない。「今ぞ胸はあきたる」となったのは、和歌とは無関係なのだ。そんなことを道綱母はここで知ったのではないか。それは、兼家が自分の所ではなくて時姫の所に帰ってしまったことで思い知らされたに違いない。兼家は、和歌に力を入れていた自分ではなくて、自分に比べたら多分それ程は兼家と和歌を遣り取りしていたわけでもない時姫の所に帰ったのだ。そして、兼家が時姫の許に足繁く通う今の状況は、より一層和歌でもってはどうこうできるものではないとも、ここで改めて気が付いた筈である。町の小路の女の出現後、ⅡはⅢと共に彼の女を格好の不満対象として保たれていた面が強い。それが今町の小路の女が消えて時姫の許に兼家が頻りに通い出しても、自分より先に夫婦となった時姫では、和歌で不満を投げかける対象にはならないのである。つまりⅡは成り立たないのである。さらに考えると、それなりに夫婦生活を送ってきた今となっては、時姫は存在するが町の小路の女は存在しない新婚時代の気持ちに戻ることもなかったのは当然だ。「うらもなう、罪なきさまにもてないたれ」という兼家の方から贈歌がもたらされるわけはない。ということは、そもそもⅠからして実現しないのが当然となってくる。詰まるところ道綱母は、和歌を詠もうにも和歌の力を見失ってしまったと思うのである。とすれば、ここでⅢと同じような状態になり、「言葉＝口頭言語」による伝達を考えたのではないか。ちなみに、今の状況では、時姫に歌を贈るなどあり得ないのは勿論、歌語りなどでも状況

を打開できない。

というように、「いかゞはすべきなど、よろづに思ふことのみ繁きを、いかでつぶ〳〵といひ知らすものにもがな」となったのは、やはり当初は「単発的な和歌」で訴えたかったのが、それが今は「到底表出することのできぬ」と知って、どちらかと言えば仕方なく「言葉＝口頭言語」による伝達を考えたと想定したいのである。

ここで道綱母は、「心づきなき胸うちさわぎて、ものいはれずのみあり」という状態になり、そして結局は長歌を詠む。ここのところも、宮崎の言い回しによれば、自ずと長歌を選んだことになる。なるほど、「なほ続けても見せむと思ひて」とあって長歌に続く叙述からはそのような感じを受けるのであるが、ここは、和歌を力に生きてきた道綱母が、短歌形式の和歌の力は見失っても、さすがに今度は長歌という当時他の人はほとんど思い付かない手段で和歌の力を取り戻そうとした、正確には、和歌の力で兼家を取り戻そうとしたと、重く捉えるべきだと考える。それは、この長歌が、長歌としては当然であろうが、技巧を凝らしたものであり、また、内容も「女からの贈歌」と捉えてよい内容になっているからである。同時に、短歌形式なら一時の思い（この場合なら、兼家が時姫の所に行って自分の許には来ない不満）を訴えるものだが、長歌ならもっと広く（この場合なら、結婚当初から）思いを込めることができるという違いも大きい。

二

そこで次に道綱母の長歌について、先学の驥尾に付してではあるが、技巧の確認と、それに内容が「女からの贈歌」に当て嵌まると見做せることの確認をしておく。なお、「第一段」とか「（2）」とか傍記していることと波線部については、この後で触れる。

第一段
思へたゞ　昔も今も　わが心　のどけからでや　果てぬ
べき　第二段（1）見そめし秋は　ことのはの　薄き色にや　うつ

ろふと　嘆きの下に　嘆かれき　冬は雲居に[2]　別れゆく
　人を惜しむと　初時雨　曇りもあへず　降りそぼち
心細くは　ありしかど　君には霜の[3]　忘るなと　言ひ置
きつとか　聞きしかば　さりともと思ふ　程もなく　と
みに遙けき　わたりにて　白くもばかり　ありしかば
心空にて　経し程に　きりもたなびき　絶えにけり
また古里に[4]　かりがねの　帰る列にやと　思ひつゝ　経
れどかひなし　第三段　かくしつゝ[1]　わが身空しき　蝉の羽の
　今しも人の　薄からず　涙の川の　はやくより　かく
あさましき　そこゆゑに　ながるゝ事も　絶えねども
いかなる罪か　重からむ　ゆきも離れず　かくてのみ
人のうき瀬に　たゞよひて　つらき心は　みづの泡の
消えば消えなむと　思へども　悲しきことは[2]　みちのく
の　躑躅の岡の　くまつゞら　くる程をだに　待たでや
は　すくせ絶ゆべき　阿武隈の　逢ひ見てだにと　思ひ
つゝ　嘆く涙の[3]　衣手に　かゝらぬ世にも　経べき身を
　なぞやと思へど　あふはかり　かけ離れては　しかす
がに　恋しかるべき　唐衣　うちきて人の　うらもなく
　なれし心を　思ひては　うき世を去れる　かひもなく
　思ひ出で泣き　我やせむ　と思ひかく思ひ[4]　思ふまに
　山と積れる　しきたへの　枕の塵も　独り寝の　数に
し取らば　尽きぬべし　第四段　何か絶えぬる[1]　たびなりと
思ふものから　風吹きて　一日も見えし　天雲は
帰りし時の[2]　慰めに　今来むといひし　ことのはを　さ
もやとまつの　みどりごの　絶えず倣ぶも　聞くごとに
　人わらへなる　涙のみ　第五段　わが身をうみと　湛へども
みるめも寄せぬ　み津の浦は　かひもあらじと　知りな
がら　命あらばと　頼め来し　ことばかりこそ　しらな
みの　立ちも寄り来ば　問はまほしけれ（58・道綱母）

第一に技巧面に目をやると、多く掛詞や縁語を用いながら見事に詠い切っているのが見て取れる。掛詞を用いて文脈を二重にしているところも随所にある。また、道綱母の長歌の「構造」を焙り出した斎藤菜穂子[15]の論は看過できない。斎藤

は、冒頭から波線部「いかなる罪か　重からむ」までは「これまでの結婚生活を四季一年に託してまとめあげられて」いて、以降は「長歌の直前まで続いてきた上巻前半部分の時間や出来事全体をも対象化して捉え得て」おり、「緊密に構造化された長歌」であると指摘している。Iに見られるように、古今調の正統な和歌を目指してきたこれまで（注４参照）同様、というより、それ以上の拘りを見せていると言えよう。

第二に内容を吟味するにあたっては、宮崎の的確な分析を見ておけば十分であると思う。宮崎は、この長歌の構成を内容に添って左のごとくに整理している。なお、先の長歌引用における傍記は、この段落構成を示したものである。

第一段　序―不安定な身の訴え。

第二段　兼家の不実さの足跡。

(1)　結婚成立時における将来への不安。

(2)　父の離京時の心細さ。

(3)　父との約束に反した兼家の疎隔。

(4)　兼家への期待のむなしさ。

第三段　兼家の薄情ゆえの絶望的境地。

(1)　はかなき身の嘆き。

(2)　父の帰京を待たずに死ぬこともできぬ身の辛さ。

(3)　兼家への執着断ちがたく出家の決断もできぬ苦悩。

(4)　独り寝をかこつ悲境。

第四段　兼家の疎遠ゆえの悲しみ。

(1)　たまさかの兼家の訪れ。

(2)　兼家の言葉を口真似する幼子の悲しい姿。

第五段　結―兼家の真実の心を知りたいとの願意。

宮崎は長歌の歴史を辿って「訴嘆的長歌の系譜」を見て取り、道綱母の長歌もその系譜に繋がるとの指摘もなしている。あるいは、道綱母の長歌に中国の「閨怨詩のテクニック」をみる山口博[16]の論もある。ともども首肯されるところであるが、右の内容整理によれば、この長歌が「男との仲の危機あるいは悪化」が見られる時に「女のあせり、歎き、訴え、渇きなどの強調」が詠み込まれるという「女からの贈歌」になって

いるのが如実にうかがえると思う。今までのような短歌形式での「女からの贈歌」なら、その時一時の思いを訴えることになるが、そういう訴え方には限界を覚えてしまった道綱母が、長歌でもって「見そめし秋」から現在迄の思いを詠い上げたと見做せよう。それが「訴嘆的長歌の系譜」に繋がったのであり、「閨怨詩のテクニック」も加味されたのである。

ということで、道綱母の長歌の技巧や内容を見ても、先に示した想定がなされるのである。つまり、兼家が時姫の許に行ってしまった現状を受けて、今まで通り短歌形式の和歌でⅡを一旦は考えた道綱母であるが、それは叶わず、また言葉で兼家に思いを訴えることもできず、それでも和歌を諦めないで長歌でⅡを体現するに至ったと想定するのである。

三

こうして長歌を詠んだ道綱母であるが、兼家に長歌を贈る際にはどのような反応を予想していたのか。次にこの問題を取り上げたいのだが、それには、兼家に長歌を贈ると言っても、次のような経緯で兼家に長歌が渡っているのに注目される。

と書きつけて、二階の中に置きたり。例のほどにものしたれど、そなたにも出でずなどあれば、ゐわづらひて、この文ばかりを取りて帰りにけり。

兼家に長歌を渡すでもなく、そうかと言って独詠歌としてしまい込むわけでもない中途半端な態度（波線部）に道綱母が出たことについても色々論じられている。私の結論を言ってしまえば、長歌を詠んだはいいが、この前時代的なものを贈って果たして兼家はどう反応するのか分からないまま、期待と虞の両方を抱きつつ贈ったという、あやふやな自分でも整理できない気分の表れと見て取れると考える。期待と言えば、自分の長歌に似合う長歌が返ってくるのを期待していたかもしれない。次節で指摘するような調子の乱れもなく、斎

藤の言葉を借りれば最後まで「緊密に構造化された長歌」であることを期待していたかもしれない。しかし、やはり当時の長歌のあり方からしても、そのような期待は果たして抱けたであろうか。一方で、返歌はないのではないか無反応ではないかという虞を抱いていたかもしれない。でも、返歌があることに少なくとも一縷の望みは持っていたからこそ長歌を詠んだのであろうとも想定される。要するに、兼家がどんな反応を返してくるか、ああだろうかこうだろうかと思い悩みながら、確たるところは全然予想できなかったのではないか。今まで兼家に長歌を贈った経験がないのは勿論、世間を見渡しても長歌を詠み贈るのはめったにないことである。それで、詠んではみたものの兼家の反応を読めず、あるいはそもそもこんなものを贈ってよいのかも分からないまま波線部のような態度に出たものと考えられる。[17] ということは、長歌で和歌の力を取り戻そうとしたのであるが、いざそれを兼家に贈る段になると、自信や期待も確信も持てなかったのである。この点は、今までの和歌に対する拘りとは違うところとして押さえておかなければならない。

第一節以来述べ来たった以上の推定は、根拠を十分に示し切れていない部分もあるが、このような過程を想定しておいた方が、後の兼家の返長歌に対する道綱母の反応やその後の推移、ひいては記事空白期間が生じた理由、また、記事が復活する理由なども説明しやすくなると考え、以下論を進めることとする。

四

さて、兼家からは長歌の返歌がきた。これはその前後と共に引用しておく必要がある。

さて、かれよりかくぞある。

①折りそめし　時の紅葉の　定めなく　移ろふ色は
さのみこそ　あふあきごとに　常ならめ　嘆きの下
の　この葉には　いとゞいひおく　初霜に　深き色

にや　なりにけむ　思ふ思ひの　絶えもせず　いつしかまつの　みどり子を　ゆきては見むと　するがなる　田子の浦波　立ち寄れど　②富士の山べの　煙には　ふすぶることの　絶えもせず　天雲とのみたな引けば　絶えぬわが身は　白糸の　まひくるほどを　思はじと　あまたの人に　せかすれば　身ははしたかの　すゞろにて　なつくる宿の　なければぞ　ふるすに帰る　まにまには　とひ来る事の　ありしかば　独りふすまの　床にして　寝覚の月の真木の戸に　光残さず　漏りて来る　かげだに見えず　ありしより　疎む心ぞ　つきそめし　誰か夜妻と　明かしけむ　いかなるつみの　重きぞと　いふはこれこそ　罪ならし　③今は阿武隈の　会ひも見で　かゝらぬ人に　かゝれかし　何の石木の　身ならねば　思ふ心も　禁めぬに　浦の浜木綿　幾重ね隔て果てつる　唐衣　涙の川に　そぼつとも　思ひし出でば　燻物の　この目ばかりは　乾きなむ　かひなきことは　甲斐の国　速見の御牧に　あるゝ馬を　いかでか人は　かけとめむと　思ふものから　④たらちねの　親と知るらむ　片飼の　駒や恋ひつゝ　いなかせむと　思ふばかりぞ　あはれなるべき

（59・兼家）

とか。

まず、兼家の長歌の技巧面における出来栄えを見ると、道綱母の長歌と比べてとかく評価が低いのである。第一に量が八十九句にすぎない。贈られてきた長歌に対して同じ程度の長さのものを返さなくてはならないとも限らないであろうが、短すぎる感は否めない。調子も七五調を基調にしていながら、二重線部辺りからは五七調に変わっており、「あるゝ馬を」「かけとめむと」は六音になっている。兼家の長歌には道綱母の長歌と同様に掛詞や縁語の駆使も見られる一方で、「大系」[18]が補注で「ややゆるみが見え、技巧のために負かされているところもあり、道綱母の長歌の切実な緊張に比

してみおとりする」と指摘しているのは、このような調子の崩れもあるのを捉えてのことだと思う。いずれにせよ、少なくとも道綱母の長歌に比べたら見劣りするのは確かである。

加えて、第二節でも引いた斎藤の指摘も見逃せない。道綱母の長歌について「緊密に構造化された長歌」であると指摘していた斎藤は、兼家の長歌については、「最初（引用者注―波線部「深き色にや　なりにけむ」迄）こそ道綱母歌の形式（引用者注―「四季一年に託してまとめあげ」る形式）を踏まえているが、最後まで構造化されてはいないのである。返歌は贈歌の内容に答えなければならないので緊密な構造化は困難であり、諦めて……」と評している。「緊密に構造化され」ている道綱母の長歌と、それを早々に「諦め」た兼家の長歌の違いは見逃せない。

次に内容に目をやると、兼家の長歌を一読する限りでは、いい加減な自分本位の主張であるとの印象を受けてしまう。冒頭から愛の不変を誓う（①の辺り）ものの、以下は、二人の不仲について自己弁護して道綱母に責任転嫁し（②の辺り）、離縁まで持ち出し（③の辺り）ながら、子供が不憫だと言って（④の辺り）締めくくっている。適当に言い逃れを並べているように思えてしまうのである。「注解」[19]は、「作者の長歌のもっていた格調の高さや緊迫感がここにはあまり感じられないのである。（中略）この長歌には激しく渦巻く感情の流れが見られず、兼家の自己弁護と作者に対する非難との発展性のない繰返しがあるのみだ」と手厳しい。篠塚純子[20]も「道綱母の長歌に比べて、何とも心の高まりの無い長歌です」と述べている。さらに「全注釈」[21]は、「作者が出家の意志をほのめかしたのに対し、その前に再婚の道があると言い出し、別れたければ別れるがよいと作者を突き放す。別れる意志も決断も作者にないのを見越してのハッタリである」と言う。

兼家の長歌の技巧面と、それに内容を一読して受ける印象についてみたが、これらを併せ捉える時、斎藤の論が大きな示唆を与えてくれる。斎藤は、先ほどの引用に続けて（……の部分）、「後半（引用者注―波線部直後以降）は内容中心

でまとめたということだろう」と想定している。要するに兼家の長歌は、最初は道綱母の長歌に技巧面で応えるべく「構造」にも拘ったが、後は諦めて内容を中心に詠んでいったというのである。この「諦めて後半は内容中心でまとめた」[22]というところが、かえって微妙かつ重要な意味を持ってくると考える。つまり、男女間の歌の遣り取りの際の常套的内容（注４参照）ではなく、夫婦関係にある二人の現実生活での駆け引きとして大きな意味を持つと思うのである。

そのようなところも、先学の論が教えてくれる。兼家の長歌に対する厳しい批評のあった篠塚と「全注釈」の見解の続きを見ておく。篠塚は次のように続ける。

しかし、変わらぬ愛を誓い、自らの行動の弁護をし、相手の冷たさを怨じたかと思うと、もう私をあきらめて他の人と結婚しろと突き放し、果ては、幼子道綱をもち出して母性本能を突くとともに父性愛を強調してみせるこの兼家の駆け引きの巧みさは舌を巻くばかり。歌のうまさや迫力はともかくとして、この長歌贈答に関する限り、兼家の勝ちといえましょう。

私に付した波線部などから、歌としての内容の低調さを横に置けば、特に後の方の内容を見て、駆け引きとしては兼家に軍配を上げているのである。「全注釈」も、先の引用に続けて、

しかし突き放し一点張りでなく、作者に変らぬ愛情をいだいていることや、道綱の将来を案ずる思いを明言して（道綱のことを持ち出すと、作者はいっぺんにへなへなとなることを、兼家はよく承知なのである）、妥協の手をさしのべる用意を忘れていない。その手につかまって、作者はこのたびの危機を脱するのであるから、兼家のほうが役者が一枚上で、勝負は明らかに作者の負けである。

と評している。先の引用から併せ読めば、構造化を諦めて内容中心にまとめたと斎藤が言う部分の内容によって、「勝負は明らかに作者の負け」との判定を下していると見て取れる。

さて、右に引いた篠塚も「全注釈」も長歌の終わりの方で道綱の境遇が詠み込まれている点に着目していたが、そこを

具体的に突いて鋭く分析しているのが、やはり宮崎である。宮崎は、道綱母の長歌の第四段(2)と兼家の長歌の傍線部④を対比して次のように述べる。

離縁という状態になった場合の、片親育ちとなる道綱の哀れさを詠みこんだところには、道綱母に対する母性の自覚をうながすものがある。道綱母の長歌にも幼子道綱の不憫な姿が詠みこまれてはいるが、「人わろげなる涙のみ」[23]とあるごとく、それは他人からみられての体裁の悪さに重点がおかれている。つまり、母としてわが子の運命といったものを顧慮するものではなく、世間体を意識したものであり、それほどの悲況であることを強調するところにねらいがあるようにみられる。いわば、彼女は兼家妻としての立場に立脚し、その立場の充実をひたすら願うものであり、それに対して兼家のほうは、文字どおり道綱母としての母性の面の自覚をもうながし、彼女の精神的成長を喚起した、ということになろう。道綱母としても、はっとする思いで、無自覚であったその意識を喚起されると同時に、そこに兼家の情愛をみたのではあるまいか。

つまり、一読したらいい加減な言い訳の羅列のようにも思えた兼家の長歌であるが、実は道綱母が「はっとする思いで……兼家の情愛をみ」るものだったのである。

これが短歌形式の和歌を詠んでいた頃の道綱母ならどうであろうか。兼家の長歌の調子が乱れているところや、早々に構造化が断念されているところに拘ったのではないか。つまりⅠに含まれる古今調の正統な詠みぶりを求める姿勢に通じる拘りである。それがこの度は、かえって構造化が崩れた後の方の内容に絆され[24]て自ら贈答歌を再開している（この第六節で検討）。それは、「返歌は贈歌の内容に答えなければならないので緊密な構造化は困難であ」ると斎藤が指摘する面も勿論与ってはいるが、やはりここは看過できないと考える。兼家の返長歌を読んだことにより、あるいは、長歌の贈答が成立したことにより、歌を遣り取りする際には、技巧や切り返しの内容よりも（注４参照）、実質的な内容も大切である

ことに気づかされているのである。短歌形式の和歌と長歌の違いを考えれば、そんなことは端から分かっているようなものでもあるが、実際に兼家の長歌を読んで、その内容からまさしく「はっとする思いで……兼家の情愛をみ」たと考えるのである。

ところで、第三節で述べた通り、当時既に前時代的なものとなっていた長歌を贈っても最悪無視されることを道綱母は覚悟していたとも思われので、返歌があっただけでも嬉しかったであろう。先に兼家の長歌に対する手厳しい評があるのを見た「注解」も、

兼家がやはり長歌をもつて作者に応じたということは兼家の行動としてももちろんであるが、この時代としてもきわめてめずらしいことではないだろうか。その意味では作者の全身的な挑みかけに身をかわすことなく取り組んだ兼家なりの誠意を読みとつてよいのかもしれない。

と言っている。私は、道綱母は兼家の誠意を汲み取ったと考える。また篠塚は、後に続く五首の贈答歌の内容から「長歌という形で返歌が返ってきたこと、そのことだけでも、道綱母の追いつめられていた心はその大部分が和められてしまいました」と断定的に述べる。道綱母は、とにかく兼家から長歌が返ってきたのを見て、少なくとも安堵はしたであろう。この安堵感が、内容を重くみることに繋がると考える。つまり、そもそも短歌形式ではなくてそれより創作が格段に難しい長歌を詠み贈ったのだから、返歌に対して今までのように技巧面に強い拘りを抱くことはできなくなるのは当然だとも言えるが、兼家の返長歌を受け取って安堵感を得たとすれば、それを読んで改めて技巧面に拘るのでは一貫しないであろう。

ということで、結局道綱母にとって問題なのは、「兼家の駆け引きの巧みさは舌を巻くばかり。歌のうまさや迫力はともかくとして、この長歌贈答に関する限り、兼家の勝ちといえましょう」（篠塚）などと評されている内容の方になる。まさしく「歌のうまさや迫力はともかくとして」、道綱母は内容をよく読んで「はっとする思いで……兼家の情愛をみ」

（宮崎）せつけられ、無下に兼家の愛情を否定して夫婦関係をこれ以上拗らせるわけにもいかないと思わざるを得なかったと思われる。

五

以上のように考えてくると、この長歌の贈答を通して、道綱母の和歌に対する意識に変化が生じたと想定されるではないか。私のこれまでの分析によれば、道綱母は正統な古今調の和歌の贈答を兼家との間で成り立たせて愛情確認に繋げたいと思い続けていた。端的に言えば、和歌としての出来栄えに拘っていたのであり、内容に関しては、兼家からの贈歌に返す時などは女性の反撥や鋭い切り返しを第一としていた（Ⅰにあたる）。本心を歌に込めるよりも、歌として備えているべき内容こそが重要であったと言える。こういう技巧と内容を備えた和歌（注４参照）で兼家との愛情の確認を求めていた道綱母であるが、兼家が町の小路の女を捨ててから時姫の許へ行ってしまっても短歌形式の歌が詠めなかった時、そして問題の長歌を詠んで兼家から返ってきた長歌を読んだ時、道綱母はワンツーパンチを受けたかのごとくに、これまでの自分の和歌に対する姿勢を否定されたように感じたであろう。特に兼家の長歌を読んで、その歌としての出来栄えよりむしろ駆け引きの具としての内容（和歌として求められている内容ではなく、生活の中で実質的な意味を持つ内容）が大きな意味を持つことに気が付いたと想定するのである。和歌を力に生きていく今までの自分の姿勢に反省を迫られたと言えば、近代的な理解になってしまうであろうか。

関連して、兼家から長歌が返されてきたのを記すのに、長歌の直前に「さて……」と書き、直後に「とか」と書いている問題を取り上げる。言うまでもなく、長歌にせよ短歌形式の歌にせよ、自ら歌を贈ってその返歌を記すのに、改まって「さて」と書くのは異様であるし、実見した長歌を引用して「とか」と書くのは矛盾している。[25] 道綱母が兼家の長歌をどう受け止めたかについて考えるには、この問題の検討も必須

となる。

この「さて」と「とか」からは（特に「とか」の方が取り立てて問題にされることが多い）、「全集」[26]と「新編全集」[27]が指摘するように、「まるでよそごとのよう」な突き放した感じを読み取ってよいであろう。問題はなぜ「まるでよそごとのよう」に記したかだが、その根幹を追究すると、見解は様々である。「全集」は「この返事に彼女が心底から満足できず、かれの返歌はせいぜいこんなところか、といった気持」を考え、「新編全集」は「長歌の応酬自体のむなしさをひびかせる」と言う。一方で、兼家の長歌の出来栄えを道綱母が評価したとみ、予想以上の出来栄えに直面した道綱母が「兼家の出来ばえにぎくりとし」（西木忠一）[28]たとか、「歌人としてのプライドを傷つけられた」（山口、注(16)に同じ）とか想定して、「さて」や「とか」と記すのであるとの見方もある。

前節で確認したように、兼家の長歌の内容は、一読したらいい加減なようで駆け引きとしてはよく錬られていると読み取れるものであった。よって「全集」や「新編全集」の見解は受け入れがたい。また、兼家の長歌の技巧面における出来栄えは、それ程のものではなかった、少なくとも道綱母のに比べたらかなり見劣りするのは確かである。とすると、自分の作より見劣りする長歌を見て、その「出来ばえにぎくりとし」たり「歌人としてのプライドを傷つけられた」りするであろうか。もしそうなら、言うなれば、自分の歌の実力は他の追随をはるかに許さないと思っていたら兼家の実力はそこそこだったので傷ついた、ということになり、いくら道綱母とは言え、それはあまりに自信過剰と言うべき姿勢ではないか。西木や山口の考えにも賛同できないのである。

そこで私の論に添えば、「さて」と書かれているのも「とか」と書かれているのも不思議ではなくなるものと考える。短歌形式の和歌の贈答の持つ力に懐疑的になって長歌を詠んだ、それは和歌の力を取り戻そうとする最後の手段と言ってもいいと思うのだが、その長歌に対して兼家から返された長歌の内容は、自分の和歌に対する姿勢にも改めて変更を迫るようなものであった。「さて」とか「とか」とかと言って、

それを突き放すような書き方をせざるを得なかったのは、むしろ当然であると想定できよう。[29]

ところで、長歌を兼家に贈る段になっての道綱母の心境を第三節で確認した。「と書きつけて、二階の中に置きたり。例のほどにものしたれど、そなたにも出でず」などの態度から、兼家の反応を見通せないあやふやさやそれに伴う自信や期待・確信のなさを読み取った。そんなところに兼家から長歌が返され、それを読んだところ和歌に対する自らの姿勢に変更を迫るような内容でもあったのだから、やはり「さて」とか「とか」とか書かざるを得なかったと想定されるであろう。

六

では次に、長歌贈答に続く計五首の兼家との贈答歌の検討に移る。

使あれば、かくものす。

なつくべき人も放てばみちのくのむまや限りにならむとすらむ（60・道綱母）

いかゞ思ひけむ、たちかへり、

われが名を尾駁の駒のあればこそなつくにつかね身とも知られめ（61・兼家）

返し、また、

こまうげになりまさりつゝなつけぬをこなは絶えずぞ頼みきける（62・道綱母）

又、返し、

白河の関のせけばやこまうくてあまたの日をばひきわたりつる（63・兼家）

あさてばかりは逢坂とぞある。時は七月五日のことなり。長き物忌にさしこもりたるほどに、かくありし返りごとには、

天の川七日を契る心あらば星逢ひばかりのかげを見よとや（64・道綱母）

ことわりにもや思ひけむ、すこし心をとめたるやうにて、月ごろになりゆく。

60～64番歌を全体的に捉えると、多くの歌で「駒」を鍵語としながら、「来ま憂げ」（62番）との掛詞を含むなど主として掛詞を使いながら、軽い感じはするものの、一応技巧的な歌の遣り取りとなっている。従って、町の小路の女への憎悪を書き連ねる前の記述、即ち46～57番歌を兼家と遣り取りした頃[30]と同様の状況に戻っているようにも思える。だとすると、63番歌から波線部の状況になるところは特に見逃しがたいので少し検討しておく。

「新編全集」は「「天の川…」の歌も「白河の…」の歌の返歌とは見がたい。」と指摘する。それはその通りで、63番歌まで「駒」が鍵語になっていたのからも64番歌は離れている。しかし、道綱母の64番歌は、直接には「あさてばかりは逢坂」に応えているのだ。[31] 兼家が63番歌と併せて、〈白河の関で何日も足止めされていた私―あなたに長く逢えなかった私―ですが、（私の物忌があける）明後日は一気に逢坂の関まで行きます―あなたとお逢いします―〉と、豪放な兼家らしく白河から逢坂までの道程を一気に飛ばして訴えてきた。ここで鍵語が「駒」から「関」に変わる。それに対して、道綱母は、「駒」でもなく「関」でもなく、「あさてばかりは」に焦点を中てて揚げ足を取っているのである。兼家の「ばかり」は恐らく〈程〉[32]というほどの意味で、明後日が七夕の日だとは意識せずに〈物忌があけたら、明後日か明明後日ぐらいには早速逢いに行きます〉と言ったのに対して、道綱母は明後日が七夕の日であることを取り立て、かつ、「ばかり」を〈だけ〉[33]という意味にわざと取りなし、〈七夕の日の明後日だけの来訪を約束するのは、年に一回だけ姿を見せるということですね〉と、切り返したのだ。[34] これを兼家は「ことわり」と思い、即ち、七夕の日であることに気が回らないまま七月七日の来訪を約束した迂闊さを思い、数ヶ月は通いがそれなりに多くなったと、道綱母は思っているのである。

いずれにせよ、自らの切り返しの答歌で終わる贈答歌で兼

家の通いを取り戻したと道綱母は思っているわけで、ならばここで道綱母のかねての理想が実現したのであり、長歌の贈答の前なら兼家との愛情を和歌の贈答で保とうとし続けたに違いない。和歌を力に生きる道綱母の姿が持続したと想定されるのである。

しかし、これら五首の歌は、これまでの歌と表面的な類似性はあるものの、これまでの歌が持っていた意味はもはや失われているとみなければならない。なぜなら、道綱母が一旦は和歌の力を見失い、その後で長歌の贈答をなして、今まで和歌に抱いていた意味とは別の意味合いを和歌に見出し始めていたと思われるからである。

まず、道綱母は嬉しそうに波線部を記しているようにも感じるのであるが、少なくとも新婚当初の道綱母なら、兼家の通いがもとに戻ることよりも、和歌の贈答が継続することを重視していたと思えるのが気に掛かる。例えば九五四年秋、道綱母の16番歌と兼家の17番歌の贈答に続けて、「返りごと書きあへぬほどに、見えたり」と言うのは、さらに歌を継ぎたかった気持ちからだと思われる。それから「又、程経て」道綱母が18番歌を贈るが、「返りごとは、みづから来て、紛らわしつ」と書いている。ここなど、兼家側に返歌を「紛らわし」たという意識が果たしてあったか。兼家の来訪よりも贈答歌の成立を望む道綱母の意識の表れだとみてとれる。

そして何より、既に第四節で触れたところではあるが、これら贈答歌が成り立った理由が重要である。道綱母の方から60番歌を詠みかけての贈答であるが、第四節で引用した「全注釈」や言及した篠塚論にもあった通り、兼家の長歌の内容に道綱母が絆されることによって60番歌以下の贈答歌が成り立ったと思われ、その点が重要なのである。兼家の長歌は、技巧面では劣るものだったし、「緊密に構造化された」（斎藤）自分の長歌に最後まで応えるものでもなく、いい加減な感じも受けるものだった。今までの道綱母なら、兼家から返歌があった時、このような側面に強い拘りを持った筈である。しかしこの度は、そのような側面よりも駆け引きとしての内容というか実質的な内容というか、そちらの方（宮崎の言う

「はっとする思いで……兼家の情愛をみ」た内容）に対して思うところがあって（宮崎は「文字どおり道綱母としての母性の面の自覚をもうながし、彼女の精神的成長を喚起した」とも言っていた）、それで短歌形式の贈答歌を自ら再開しているのである。[35] 五首の贈答歌からは、今までの歌が持っていた意味はもはや失われていると私がみる所以である。

それは、この後に三年半の記事の空白期間があることとも繋がる。ここで問題が大きくなるのであるが、そもそも前半部はどのような作品であるのか、私の見解を明らかにしておきたい。端的に言えば、道綱母が和歌を力に生きてきたというか、和歌を力に生きようとしてきた自分の姿を描くのが前半部であったと考える。ところで、前半部の長歌贈答までの内容と特に道綱母の長歌に詠まれている内容に重なる部分が多くあることから、前半部は長歌をもとに綴られていったという説がある。[36] 逆に、長歌の贈答は前半部の内容をもとにして前半部執筆時に道綱母によって創作されたのではないかという説[37]すらかつてはあった。しかし、和歌を力にして生きてきた道綱母が、そんな己の姿を前半部に写したとすれば、前半部の内容が長歌の内容と重なるのは当然ではないか。つまり、前半部には兼家との夫婦生活において特に意義深い歌が載せられていると一応は考えられるが、長歌の贈答をなした時点で、道綱母が兼家との夫婦生活を振り返った時も、同じ歌歌が頭を過ぎったに違いない。要するに、長歌を詠んだ時点と、前半部執筆時点と、同じものが意義深いものとして道綱母の頭に過ぎったのは当然なのである。かくして、前半部の内容と長歌の内容は、自ずと重なってくるのである。長歌が前半部執筆時に創作されたという説は今では問題にならないと思うが、長歌の内容を辿りながら前半部が綴られたのであろうという説についても、特にそのような想定をする必要はないと考える。[38] 以上のように捉えておけば、和歌を力に生きる己の姿を書き綴ってきた道綱母が、長歌贈答とそれに続く五首の歌の遣り取りまで書いた時、さらに書き続ける事柄を一旦見失ってしまったのもよく分かるではないか。五首の贈答歌を書いたところで、歌が今まで持っていた意味を失っ

てしまっているのである。兼家との贈答歌は記事空白期間にも当然あったであろうが、道綱母はそれを力にして生きているわけではもうなく、『蜻蛉日記』に書き継ぐべきものでもうないのである。[39]『蜻蛉日記』の記事が再開するには、道綱母が和歌に新たな意味を見出すか、散文に意味を見出すかを待たねばならないのである。

おわりに

兼家が町小路の女との関係を切っても時姫の所に行ってしまって道綱母の許には帰ってこなかったというところあたりから、長歌の贈答と引き続く贈答歌を中心に考察を加え、和歌を力に生きる道綱母の姿勢に変化が生じた様相を明らかにした。最後は、上巻の記事の空白期間が生まれた要因にまで考えを及ぼした。このような論考を成した上からは、次の当面の課題として、記事空白期間の後で後半部が書き継がれる理由などの考察が挙げられる。

それに関連して、一二触れておきたいことがある。

一つは、下巻で養女にむかえる女子の母即ち源兼忠女と兼家との関係に関することである。二人の関係は上巻の記事空白期間にあったにも拘わらず、下巻の養女をむかえる段になって始めて記述される。この件を取り上げて「養女問題執筆削除説」と称して論じたことがある。[40]それは、前半部の考察を始めるより前で、最初に学会発表した時からしたらもう十五年程も前に出し始めた説である。が、その後さして発展させることもできないまま今日まできている。本稿と関連付けても、また、後半部が書き継がれる理由を考察するにあたっても、大幅に修正する必要が出てくるかもしれない。

もう一つは、水野隆の前半部が単独に成立して流布したという説[41]に関してである。私自身前半部の研究を進めていくにつれて、実は水野説の妥当性を感じつつあった。ただ確証は勿論得られないので、積極的に水野説に従って論考するのは避けてきた。今回長歌贈答を中心に検討してみても、水野説に対する本格的な検証の必要をやはり覚えたものである。[42]そ

の水野説は、後半部冒頭あたりの章明親王との交遊記事、特に和歌を重要視して組み立てられているが、後半部が再開する理由を考えるにあたっても、水野説は改めて検討課題に入ってくると思われるのである。

【注】

(1)副題「蜻蛉日記と道綱母」(二〇〇九年一〇月・新典社新書41)。

(2)関連する拙稿は、次の通り。

(1)『『蜻蛉日記』上巻の最初の引歌表現―いかにして網代の氷魚にこと問はむ―」(伊井春樹編『古代中世文学研究論集第一集』一九九六年一〇月・和泉書院、後、『歌語り・歌物語隆盛の頃―伊尹・本院侍従・道綱母達の人生と文学―』二〇〇七年一〇月・和泉書院に所収)。

(2)「兼家の嘘の言い訳を求める道綱母の歌語り享受―道綱母対町の小路の女と恵子女王対好古女―」(『言語文化研究徳島大学総合科学部』14・二〇〇六年一二月)。

(3)『『蜻蛉日記』上巻の「返し、いと古めきたり」考―道綱母と兼家の贈答歌の問題を中心に―」(『言語文化研究徳島大学総合科学部』16・二〇〇八年一二月)。

(4)「『蜻蛉日記』上巻46～48番の贈答歌を中心とした記事―道綱母にとっての和歌、兼家との贈答歌―」(『言語文化研究徳島大学総合科学部』17・二〇〇九年一二月)。

(5)「『蜻蛉日記』上巻49～52番の二組の贈答歌を中心とした場面の考察―道綱母にとっての和歌から実際面を探る―」(『国文学攷』206・二〇一〇年六月)。

(6)「「さ夜ふけてかくやしぐれのふりは出づ」兼家に対する道綱母―『蜻蛉日記』上巻57番歌の場面―」(伊井春樹編『日本古典文学研究の新展開』二〇一一年三月・笠間書院)。

(7)「離婚状態の時の道綱母の歌―「矢といふにこそ」詠を巡って―」(古代中世文学論考刊行会編『古代中世文学論考第31集』二〇一五年一〇月・新典社)。

(8)「『蜻蛉日記』上巻の離婚状態を脱した時の贈答歌―浜千鳥の贈答歌をめぐる考察―」（『言語文化研究徳島大学総合科学部』23・二〇一五年一二月）。

(9)「『蜻蛉日記』上巻の桃の節供の折を逸した贈答歌」（『詞林』60・二〇一六年一〇月）。

(10)「『蜻蛉日記』上巻桃の節供の日とその翌日の場面」（『言語文化研究徳島大学総合科学部』24・二〇一六年一二月）。

(3)「『蜻蛉日記』上巻は、兼家が兵部大輔に任命される九六二年春迄三年半ほどの記事を欠く。この記事空白の期間を挟んでそれより前を上巻前半部、後を上巻後半部として、以下、それぞれ前半部、後半部と称する。

(4)増田繁夫「『蜻蛉日記』の和歌―十世紀後半の和歌史―」（『国語と国文学』72巻5号・一九九五年五月）から大きな示唆を受けた。同論は、道綱母が日記という新しいジャンルを切り拓いていった必然性を次のように説いている。

この日記の歌からすれば、それらの中でも作者が必須の条件と認めていたものは、巧みな掛詞などによる「ことば」の巧みさや、和歌的な「ことわり（論理構成）」や、整った姿、といったものであったらしい。しかもそれらは「古今風」の狭い概念のものであった。

(5)拙稿(3)及び(8)参照。

(6)久保木哲夫「平安期における贈答歌」（『和歌文学の世界第一集』一九七三年七月・笠間書院、後、『折の文学平安和歌文学論』二〇〇七年一月・笠間書院に所収）によれば、結婚後男からの贈歌が少なくなることは一般的なのである。しかし、道綱母は結婚後も兼家から贈歌を求め続けたのである。

(7)『王朝女流日記論考』（一九九三年一〇月・至文堂）「第五章　日記文学における和歌（その2）―女からの贈歌―」、及び、「第八章　『蜻蛉日記』の一解釈―「なほもあらじ」考―」。引用は、第八章から。

(8)道綱母から贈ったどの歌が「女からの贈歌」に当たるかは、拙稿(4)で検討している。

(9)拙稿(1)及び(2)参照。

(10)前半部において、ⅠⅡⅢが主としてどの時期にみられるかについては、拙稿(8)で纏めておいた。

(11)長歌とそれに続く五首の贈答歌については、拙稿(4)と(5)でも少し触れているが、本稿における検討は、(4)(5)で述べたところからは変化している面がある。

(12)『蜻蛉日記』の引用は、歌番号も含めて角川文庫『蜻蛉日記』(柿本奨著、一九六七年一一月)によるが、一部改めたところもある。底本は、宮内庁書陵部蔵桂宮本。傍線等は私に付した。

(13)「『蜻蛉日記』上巻の長歌をめぐって」(『論叢王朝文学』一九七八年一二月・笠間書院)。後にも宮崎論に触れることがあるが、すべて同論文による。

(14)拙稿(4)、(5)、(6)、(8)、(9)、(10)参照。

(15)「『蜻蛉日記』上巻の道綱母長歌の構造―書陵部本を生かした読解から―」(『日記文学研究誌』12・二〇一〇年六月、後、『蜻蛉日記研究―作品形成と「書く」こと―』二〇一一年四月・武蔵野書院に所収)。後にも斎藤論に触れることがあるが、すべて同論文による。

(16)「蜻蛉日記の長歌」(『一冊の講座蜻蛉日記』一九八一年四月・有精堂)。

(17)宮崎は、「使いに届けさせることもできず、といって来訪した兼家に侍女などをして手渡すこともまたできずに、このようなわざとらしい措置をとったところには、よそゆきのことをするための気恥ずかしさ、こそばゆさのあったことが観取される。」(傍点原文)と読み取っている。本稿とは力点が違うが、これも否定されるものではない。続いて宮崎が「ともかく、それほどまでしても、胸中を兼家に伝えたいという切実さがそこにこめられていたのである。」というのは、本稿の考えと矛盾しない。

(18)「大系」は、日本古典文学大系『土左日記かげろふ日記和泉式部日記更級日記』(川口久雄著、一九五七年一二月・岩波書店)を指す。

(19)「注解」は、「蜻蛉日記注解　十四」(秋山虔・上村悦

子・木村正中著、『国文学解釈と鑑賞』27巻7号・一九六三年六月・至文堂）を指す。

(20)『蜻蛉日記の心と表現』（一九九五年四月・勉誠社）。後にも篠塚論に触れることがあるが、すべて同著による。

(21)「全注釈」は、『蜻蛉日記全注釈上巻』（柿本奨著、一九六六年八月・角川書店）を指す。

(22)兼家の意識が実際にこのようなものであったかどうかは分からないが、結果としてそのような長歌として出来上がっている点が、今は重要であると考える。

(23)宮内庁書陵部蔵桂宮本では「人わろくなるなみたのみ」となっている。角川文庫本は「人わらへなる　涙のみ」と校訂している。桂宮本のままで読む説と、宮崎と同様の改訂案に従う説が大勢を占めている。いずれにせよ、「全注釈」が言うように、「作者は見え・聞えを気にしている」ことになろう。「注解」、及び、上村悦子『蜻蛉日記解釈大成1』（一九八三年一一月・明治書院）も参照。

(24)宮崎は、「兼家のこの長歌は評判がはなはだよくない」と言って、「大系」「注解」「全集」の批評を引いて、「兼家との間に交された四首の贈答歌が、長歌に用いられた語句を詠みこんでのものでありながら、切迫感のない、むしろ余裕のある、平穏な雰囲気に包まれていることから推察すると、道綱母は兼家の返歌によってなにほどか納得するところがあり、緊張感を解き、精神的なゆとりを得たのではなかろうかとみられる。それは、兼家の反応はどうあれ、鬱積する思いをともかくも吐露しえたという精神的浄化の作用も幾分かはあろうが、それよりも、兼家の対応が誠実であり、返歌の内容に得心のいくものがあったからと考えられる。」とも述べている。

(25)「全注釈」は、「底本（引用者注―宮内庁書陵部蔵桂宮本）のまま「とか」としては、なぜ疑問の意を添えるのか、説明できないであろう。」と言い、「曾」の草体が「可」の草体に誤られたとみて「とぞ」に改訂している。しかし、上村悦子『蜻蛉日記校本・書入・諸本の研究』（一九六三年一〇月・古典文庫）によると、「とそ」とする本はない

ようであるし、「とか」で解すべきところだと考える。

(26)「全集」は、日本古典文学全集『土佐日記蜻蛉日記』（木村正中・伊牟田経久著、一九七三年三月・小学館）を指す。

(27)「新編全集」は、新編日本古典文学全集『土佐日記蜻蛉日記』（木村正中・伊牟田経久著、一九九五年一〇月・小学館）を指す。

(28)「長歌贈答」（『樟蔭国文学』26・一九八九年三月、後、『蜻蛉日記』の研究』一九九〇年九月・和泉書院に所収）。

(29)ここでも宮崎論について触れておかなければならない。宮崎は「なんの感想も示さず「とか」とだけ叙するのは、この返長歌によってある程度満たされる思いを得た道綱母の心境の朧化・韜晦ではあるまいか」と想定している。拙稿(4)と(5)では、この部分も宮崎論に従った見通しを述べておいたのであるが、本稿でも検討を経て、考えを改めたところがある。注(11)参照。

(30)拙稿(4)、(5)、(6)で検討した。

(31)「全集」「新編全集」は、問題の五首は長歌に続いて遣り取りされたものではないとみている。確かに年替わりがあるごとにそれを記していた前半部なのに、九五七年一〇月以降年が改まったことを記さないまま内容から秋とみて間違いない長歌の贈答になるので不審である。厳密に細かく論じなければならない問題ではあるが、私は、「全集」「新編全集」を除く大方の注釈書や論者と同様に、町の小路の女の零落と彼女に対する憎悪を記すところから先に引用した64番歌の直後の一文「ことわりにもや思ひけむ、すこし心をとめたるやうにて、月ごろになりゆく。」までを九五八年とみてよいと考える。63番と64番の続き具合以外にも「新編全集」が頭注で問題視している点についてみておく。「長歌の結び道綱のことは「なつくべき…」の歌以下に引き継がれず」と言うが、63番の道綱母詠の「こなは」の「こ」は「子」を掛けているとみるべきだろう。また、「白河の…」の歌にうかがえる駒牽（こまひき）は八月の行事で、次の「七月五日」へはつながらず」と言うが、ここは白河の関を馬が通過することを詠み込んでおり、宮中の八月の年中行事

である駒牽に特定する必要はあるまい。「全注釈」は、「朝廷へ献上したり、貴族に贈ったりするために、奥州から良馬を引いて上洛するというこの当時よくあった状況（その最も有名なのは八月の年中行事駒牽（こまひき））で仕立てる。」と注しているが、その「よくあった状況」を詠み込んでいるとみられる。よって、「次の「七月五日」へはつながらず」とも言えなくなる。

(32)『日本国語大辞典第二版第十巻』（二〇〇一年一〇月・小学館）によれば、「①おおよその程度・範囲を示して、取り立てる。ほど。ぐらい。ころ。」と語義説明して、中古の用例としては『竹取物語』と『土左日記』を挙げている意味である。

(33)『日本国語大辞典第二版第十巻』（注(32)参照）によれば、「②体言・活用語の連体形を承け、限定の意を表わす。ほんの…だけ。中古以後の用法。」と語義説明して、中古の用例としては『古今集』860番歌と『源氏物語』蜻蛉巻を挙げている意味である。

(34)この解釈は「長き物忌にさしこもりたるほどに」を兼家の物忌とみての解釈であるが、「新編全集」は九六二年の五月（章明親王との交遊があった頃）にある道綱母の「四十五日の忌」と同時のこととみている。つまり、こことこの後記事が空白になる期間を挟んで記事が復活する頃（九六二年春）と、年次に混乱があるとみているのである（注(31)参照）。しかし、兼家が自分の物忌明けに合わせて来訪を約束してきたとみた上での私の分析によれば、記事年次の混乱をみる必要はなく、従って強いてここの「物忌」と少し離れて出てくる「忌」を同時のこととみる、やや無理があると言わざるを得ない解釈をする必要もないであろう。なお、「全集」「新編全集」の見解に従うものに、深沢瞳「『蜻蛉日記』道綱母の物忌日」（『大妻女子大学大学院文学研究科論集』19・二〇〇九年三月）がある。深澤は「「ながき物忌」が兼家の事情であったなら、「すこし心をとめたるやうに」なったことに対し、道綱母が「ことわりにもや思ひけむ」などと推量するだろうか、と思うのである。」

という疑問を呈して、この物忌を道綱母のものとみている。が、私にはこれがなぜ疑問になるのかよく分からない。明後日が七夕の日であることを意識していなかった兼家に対して道綱母が歌でそこを突き、その後兼家が「すこし心をとめたるやうに」なったのは、七夕に意識が及ばなかった自分の不覚を突かれたことに兼家が納得しての結果だと道綱母が推測しているとみればよい。

(35) 60番の道綱母歌の直前に「使あれば、かくものす。」とあることからすると、兼家の長歌を持ってきた「使」に道綱母が60番歌を託したようである。要するに、五首の贈答歌は長歌の贈答に引き続いて遣り取りされたように思われる。この点、拙稿(4)の注（18）及び（19）参照。ただ、長歌から贈答歌にかけて道綱母の和歌に対する意識の変化をみる本稿の論旨によれば、長歌と60番歌以下との間に幾許かの時間経過があった方が自然のようにも思われる。この辺りの細かい詰めは、今後の検討課題としたい。

(36)「大系」、喜多義勇『全講蜻蛉日記』（一九六一年一二月・至文堂）など。

(37) 西原和夫「蜻蛉日記覚書―その長歌をめぐる一試論―」（『日本文学史研究』7・一九五〇年一〇月）。

(38) 宮崎荘平は、「長歌がすでに潜在的意識として先取りし凝縮的に形象づけていたからこそ、それが契機となり、それにうながされるかたちで日記の形成がすすみ、日記の進行につれて潜在的なものが次第に顕現し、具象化されるに及んだ」と説明している。このような想定も必要ないと考える。なお、斎藤が「長歌詠作時の道綱母が、求婚以来これまでの結婚生活を対象化して捉えていたということになろう」というのは示唆的に受け止めた。

(39) 宮崎は、「兼家の愛情を確認しえた道綱母が、感情を静め、なだらかな心を保つことによって、兼家との間に平穏な生活がよみがえったものと考えられる。長歌以後の四、五年間の記事の空白は、そういう平穏無事な歳月が続いたがゆえに記事の素材となるものがなかったことを物語るものであろう。」と述べている。本稿は宮崎論に大きく依ら

せていただいたが、この部分の見解に関しては、やはり道綱母の和歌を力に生きる姿に重点を置く本稿においては、宮崎論とは別の見解に達したものである。

(40)「『蜻蛉日記』上巻欠文部の養女問題攷―養女問題執筆削除の可能性―」(古代中世文学論考刊行会編『古代中世文学論考第10集』二〇〇三年一一月・新典社)、及び、「『蜻蛉日記』上巻欠文部の養女問題・続攷―養女問題執筆削除説における上巻前半部の主題を中心に―」(古代中世文学論考刊行会編『古代中世文学論考第16集』二〇〇五年一一月・新典社)。ともに、『歌語り・歌物語隆盛の頃―伊尹・本院侍従・道綱母達の人生と文学―』(注(2)(1)参照)に所収。

(41)「蜻蛉日記上巻の成立過程に関する試論」(上村悦子氏編『論叢王朝文学』一九七八年一二月・笠間書院)、「蜻蛉日記上巻前半部の成立について」(『国文学研究』67・一九七九年三月)、「蜻蛉日記上巻の成立過程に関する試論補稿」(『竹取物語・日記文学とその周辺』一九八〇年九月・桜楓社)。

(42)斎藤も水野説には肯定的である。「『蜻蛉日記』上巻前半部の成立試論」(『日記文学研究誌』8・二〇〇六年三月、後、注『蜻蛉日記研究―作品形成と「書く」こと―』(注(15)参照)に所収)も参照。